

蝉ねむるひと夏の業なしとげて

号

「業」とは子孫を残すための行為に他ならず、僅か一週間余りの地上生活をその行為のために鳴き尽くし、今は地に落ちた骸蟬への命への思いが作者の感慨となって結実した一句。季重なりを感じさせないのは作者の業の深さゆえか。

【俳夢句会 講師 高橋白雀】